

桜の種：近代日本に生まれ創造した人

はじめに：

桜の種へようこそ。こちらは明治時代の近代日本社会の形成を探るもので、左側にあるのは日本の明治時代の国の近代化に、先駆者達が海外をモデルとしたものと日本のもの両方を用いて重要な近代国家を創造しようとしたときのものです。そして右側にあるのは、国を大きく変えた武藤山治の人生をたどるもので、どの国にとっても近代化への道は、国民性を明確にし、経験、アイディア、そして象徴を共有し推進する必要があります。明治時代の改革者たちは「”近代国家”とはどのようなものなのか？」という基本的な問いかけに、先進国からの考え方、慣習、そして制度を取り入れようと考えました。こうしたアイデンティティとの闘いは、武藤山治のような人々の人生から見ることができます。山治は外国の慣習や技術を積極的に取り入れようとしただけではなく、「行い正しければ眠り平らかなり」という独自の倫理観で行動しようとしました。この哲学が日本の伝統的な価値観に値するかどうかは分かりませんが、日本のビジネスマンで資本主義者の彼は利益の最大化や労働者の福利厚生を重視提供しました。

日本について：

1603年から1868年まで、日本は徳川幕府の下で江戸（現在の東京）を拠点とする封健社会でした。江戸時代、天皇はごくわずかな政治力しかなく、将軍宣下の儀式の中でしか反映されませんでした。19世紀の徳川幕府はかなり弱く、大名に対して権力を主張することができませんでした。

社会は、封建的な將軍や大名、侍など、非常に階層化されていました。商人、職人、農民はこれらのトップ層の下であり、えた、非人は一番下で最小限の権限で占めていました。

2世紀にわたり、將軍たちは、貿易協定や他国との重要な関係を避け、鎖国の政策を行っていました。しかし、西側諸国は貿易のために日本を開放することを熱望していました。日本のこの「開国」は、徳川幕府の統治を不安定化させるとともに、新たな時代の到来を後押しすることになりました。

明治維新と呼ばれるこの新しい時代は、天皇とその皇族他が、米国とヨーロッパの政府をモデルとして急速な産業近代化を追求し、政治、社会、経済の諸制度を再構築しました。

1868年明治政府は五箇条の御誓文という政府の基本方針を布告します。最初の4つの条文は定義して実現させるのは難しかったのですが、5つ目の条文はすぐに実行する事が出来ました。5つ目の条文は、「国を強化するために新しい知識を世界から学びましょう」という内容でした。その条文の先駆けとして1871年から1873年に岩倉使節団を海外に派遣しました。この使節団は、主要な政治指導者や学者達の、米国とヨーロッパへの外交航海の旅でした。

新しい指導者たちは西側大国の政治、経済、社会の諸機関を調査し、彼らの目的に合ったものを選び取り入れました。1889年の政治改革は、天皇を君主にして議会政府を樹立するという新憲法に至りました。

新しい国のために必要なスキルを教えるための義務教育が導入されました。この義務教育の教えは新しい国家主義の基盤として、儒教と神道道德を合わせたものを天皇に対する忠誠心と共に教えることを重要視していました。

1871年、明治政府は武士をはじめとする市民に職業自由を与え、階層社会ではなくなつたため、えた、非人と差別されてきた人々も平民となりました。侍とその領主は封建的な特権を失い、商人の役割はというと以前は利益のみを考えるので軽蔑されていましたが、この利益が元で結果として影響力を増加させることになりました。また、えた、非人と同じ範疇（はんちゅう）に突然自分達自身がなった農村部の農民達の抵抗を広範囲で作り出す結果となつてしましました。

新しい西洋技術の積極的な取り入れは、産業の生産性と多様化を画期的に引き起こしました。日本は、自国の経済成長にはるかに大きな投資を行い、大恐慌まで続いた国の経済繁栄の時代につながりました。輸出入は、1885年から1905年間で2倍以上になり、起業家は最初の国立銀行を設立し、日本の綿織維産業の発展を先導しました。

明治政府は急進的な経済改革の中で、地租改正を行いました。土地所有者は、収穫量に基づいて主に税金を払うという古い封建的な方法ではなく、政府に対して地価に対して3%の税金を払わなければならぬというものになりました。これは政府改革の資金源となりましたが、低収量期の小さな土地所有者達は税負担が大きかったです。1880年代には、松方デフレで米の価値が低下し多くの小規模の地主が経済的に苦しめられ土地を失ってしまいました。

1918年から1931年までの間の政党政治への不満は、政治的緊張の高まりにつながりました。政党政治は腐敗と欲にまみれ、右翼の国粹主義者を怒らせました。1920年から1930年にかけては、政治的な内紛が、「暗殺による政府」と呼ばれるものにつながりました。多くの右翼国家主義のグループは、大恐慌中に国際的な挫折と経済の衰退した事で政治家と彼らの実業家パートナーを非難します。この時何人かの総理大臣やビジネスマンが暗殺されました。

武藤山治について：

1867年の愛知県で、山治は大庄屋で福澤諭吉の西洋事情を読んだ父の下に生まれました。当時、西洋の自由主義の提唱者で啓蒙思想家であった福澤は、初めて独立宣言と米国憲法を日本語に翻訳し、後に山治の恩師となります。福澤は貿易の開放、文化交流、封建制度の改革を支援しました。

武藤山治は、福澤の下で学び、1884年、慶應義塾を卒業。彼はイギリスのケンブリッジ大学で文学を学ぶことを楽しみにして実家に帰りました。帰宅すると、彼は父親からお金を借りた親類が「松方デフレ」の影響で返済できなくなったことを知りました。残念なことに、この親類に貸していたお金が海外教育用だったため、サンジの研究に支払うことは結局できませんでした。米国へ進学し、日本の発展の先駆者となるよう奨励していた福澤とも話し合った結果、山治はイギリスではなくサンフランシスコ行きの東京船に乗り込むことになるのでした。

彼がサンフランシスコに滞在した後、山治は日本人が他国で過ごす時間を提唱し、支援するための本を出版することを決めました。彼の米国移住論はアメリカでの経験を反映していました。武藤はタバコ工場で働いた後、1885年から1887年の間カリフォルニア州サンノゼにあったパシフィック大学に通いながら、寮のウェイターとして働いていました。この本は、米国での彼の経験に基づいて、米国への日本の移民を奨励することを意図していました。武藤の米国移住論は貧しい人や失業者、そして学生たちに、アメリカで新しい生活を始めさせることを奨励しました。

帰国後、武藤は産業界で成功を収めました。1894年にカネボウの紡績会社を経営し、1921年に社長に就任した彼の革新的な経営スタイルは、国際的認識を得ました。これらの経営判断はすべて、彼の工場で組合を避けたいという武藤の願望と、資本主義でも道徳的に経営ができるという彼の哲学信念によるものでした。

1920年までに、彼の革新的な経営スタイルで武藤は有名になりました。彼は短期間ではありましたが、政治家になりました。彼の最も顕著な成功は、戦争の犠牲者に連邦社会保障規定を提供した1917年の軍事救護法でした。国民の政治教育が不十分だという政治家時代の彼の経験から、1931年国民會館を設立し、政治教育の普及を試みました。国民會館は今日でも講義、議論、出版を通して国民に教育の場を提供し続けています。

恩師福澤の門下生たちからの要請により、武藤氏は、経営難の時事新報の経営を引き継ぎました。新聞の財政を立てなおしている間、政治的腐敗を書いた彼の時事新報の記事は後に帝人事件と発展する重要な公共スキャンダルとなります。このスキャンダルは山治の経営理念「道徳と経済合理性の融合」に反していました。道徳行動を簡単に言うと、「良い行動」なしに資本主義の成功はあり得ないという事です。

最後に：

近代日本史の概観は、モダンで国際的、そして伝統的な日本の文化を合わせて国を創り出したという事です。1934年3月9日、福島伸吉という無職の男によって、武藤山治は暗殺されました。日本の改革者たちが、近代日本とは何か、そして何をすべきかを定義しようとして

きた時代に武藤は生まれました。`武藤の革新的なアイディアや経営スタイルはモラルコードに沿うなら海外から取り入れても良いと考えていました。彼の哲学はただ一つ：「行い正しければ眠り平らかなり」という事でした。カネボウでの彼の功績が示すように、彼は資本主義者で利益をたくさん上げながら、温情主義経営を開発し、彼の哲学を反映し、生産性を向上させました。大きな成功にもかかわらず、「人は正直で真面目であるべきだ」という思いが残っていました。倫理的な規範に従った武士のように、サンジは慈悲、勇気、先見、名誉、謙虚さ、高潔さ、忠誠心、正義といった価値観を体現しました。武藤山治は陰の英雄であり、日本最古の現代武士の一人なのです。